

バーナード・ボザンケの生涯と著作

—ボザンケ年譜—

芝田 秀 幹*

Bernard Bosanquet's Life and Works:

A Chronological Record of Bernard Bosanquet

SHIBATA, Hideki

1. はじめに

イギリス理想主義（オックスフォード学派）（British Idealism : Oxford School）は、19世紀から20世紀にかけてのイギリスにおいて、古代ギリシャ哲学やドイツ観念論哲学などを援用しながら、経験論、原子論的個人主義、そして功利主義といったイギリスの知的伝統を批判・修正した思想運動と言われている。そしてこの思想運動の創始者であるトマス・ヒル・グリーン（Thomas Hill Green : 1836-1882）をその前期の代表者とすれば、本稿でとり上げるバーナード・ボザンケ（Bernard Bosanquet : 1848-1923）¹⁾は、後期の代表者と目される思想家である。

ところで、わが国のボザンケに関する研究は、体系的な研究書がいくつか上梓されているグリーンのそれに比してやや遅滞の感が拭えず²⁾、ボザンケに関する本格的な研究書は無論のこと研究論文さえも僅少という状況にある。その一方で、ボザンケに対する評価に関しては、ホブハウス（L.T.Hobhouse）らによるドイツ＝ヘーゲル流の「国家主義者」や「現状肯定主義者」、あるいはマルクーゼ（H.Marcuse）による「ファシズムの元凶」といった否定的なものが主流をなしており³⁾、またそうした評価が（その真偽が確かめられることなく）ボザンケに対する「教科書」的説明として欧米及び日本の政治学界で支配的となっている。

しかしながら、近年欧米で再開されているボザン

ケ研究では、従来のボザンケ像の妥当性を検証しようとする観点から研究が進められ、その成果として、より自由主義的、より民主主義的、より社会改良主義的な新たなボザンケ像が提示されている⁴⁾。

だが、ある思想家の思想内容を全体的かつ体系的に把握するさいには、その思想のみを検討するだけでは不十分である。特に、そうした思想を生み出した背景、つまり思想家の生涯及び著作を追跡し、本来の思想研究をいわば「肉付け」する形でフォローしなければ、その研究は跛行的なものとならざるを得ない。

以上を踏まえて、本稿は、ボザンケの政治思想のより客観的な把握作業の一環として、これまで日本ではおろか欧米ですら詳細にはあまり検討されたことのないボザンケの生涯とその著作に焦点を当て、世紀転換期を生きたイギリスの哲人の横顔を浮き彫りにし、かつ彼の思想の背景となるものを探りながら、上記のような新たなボザンケ像の構築に資することを目的とする。

なお、そのさいの試みとして、本稿では、ボザンケの生涯を編年体、つまり年譜形式で追跡することにした。ボザンケに関する年譜は、管見の限りでは、近年ボザンケ研究が再開されている欧米においてすらいまだ作成されたことがなく、日本においては彼の生涯そのものを扱った論考すら存在しない。それゆえ、年譜でボザンケの生涯をたどる本稿の試みはこうした観点からも正当化されるであろう。

ところで、ボザンケの生涯を素描するに当たり、筆者は、彼の夫人ヘレン・ボザンケ（Helen Bosanquet）がボザンケの死後に出版した伝記『バーナード・ボ

（2000年12月5日 受理）

*宇部工業高等専門学校 一般科 社会教室

ザンケ』(Bernard Bosanquet : A Short Account of his Life)を主要資料として採用し、このヘレンの業績に依拠しながら彼の人生を追跡することにした⁵⁾。この書は、ボザンケの私生活でのエピソードや種々の実践活動を今に伝える数少ない書であり、その後の欧米の研究者がボザンケを(簡単に)紹介する場合に常に依拠してきたものとして重要である。ただ、その書は各章ごとに年代別に整理はされているもの

の、随想的な内容であるがゆえに必ずしも編年体的には記されておらず、時系列的に把握するには少々厄介である。そこで、本稿では、まずヘレンの著述内容を外科手術的にいったん解体し、その後他の多くの資料から得られた情報をそこに挿入し、最終的にそれらを統合・整理する、という手順を踏んだことをあらかじめ述べておくことにしよう。

2. ボザンケ年譜

年	年齢	
1848.12.14.		イギリス、ノーサンバーランド州アルンウィック(Alnwick)にある小村ロック(Rock) ⁶⁾ の「ロック・ホール」(Rock Hall)に5人兄弟の末子として生まれる ⁷⁾ 。 父はR・W・ボザンケ師(the Revd R.W.Bosanquet)。
1848. 8. 6.		洗礼を受ける。
1855. 6.14.	7	「ロック・ホール」の修繕のためにイギリス出国。フランス・ディジョン(Dijon)、スイス・ジュネーブ(Geneva)に滞在(10.12まで)。 帰国後はメーフエア(Mayfair)に滞在。
1856.	8	母親が病弱なこと、兄弟が不在なことから、ヨーク州、シャーバーン(Sherburn)の全寮制の進学準備校(preparatory school)に進学。
1860.	12	エルストリー(Elstree)校へ進学。
1862.	14	ハロー(Harrow)校へ進学 ⁸⁾ 。
1867.	19	オックスフォード・ベイリオル・カレッジ(Balliol College)に進学。 ジョウエット(B. Jowett) ⁹⁾ 、T・H・グリーン ¹⁰⁾ らの影響を受ける。 新たにピーターズ(F.Peters)、ロック(C.S.Loch)、ブラッドレー(A.C.Bradley)、ハリソン(E.Harrison)、モリス・スターリング(Morris Stirling)、デイヴィッド・ダンデス(David Dundas)らと知り合う。 マンチェスター(Manchester)の展覧会へ(1週間)旅行 ¹¹⁾ 。
1870.	22	B.A.(Bachelor of Arts)学位取得のための公式第1次試験(Moderations : Mods)及び本試験(Greats)において最優秀成績を収め、人文学(Lit.Hum : literae humaniores)を卒業。 オックスフォード・ユニバーシティー・コレッジ(University College)のフェロウ(Fellow)に選定される ¹²⁾ 。 兄チャールズ・B・P・ボザンケが「慈善組織協会」(the Charity Organisation Society)初代事務局長に就任。
1871.	23	オックスフォード・ユニバーシティー・コレッジのフェロウに着任、個人指導チューター(tutor)兼任 ¹³⁾ 。
1875.	27	兄、チャールズ・B・P・ボザンケが「慈善組織協会」事務局長を辞任。
1876.	28	親友ロックが「慈善組織協会」事務局長に就任。
1878.	30	F・H・ブラッドレー(F・H・Bradley)『倫理学研究』(Ethical Studies)が出版される ¹⁴⁾ 。 シエマン(Schömann)『アテネの立憲制史』(Constitutional History of Athens)を翻訳出版。
1881.	33	オックスフォードのフェロウを辞し ¹⁵⁾ 、ロンドン、エバリー・ストリート(Ebury Street)131へ移住(以後8年間下宿生活)。
1881.夏		ポントウレシナ(Pontresina)を旅行。
1882.	34	T・H・グリーン(1836-1882)死去。
1883.	35	F・H・ブラッドレー『論理学原理』(Principles of Logic)出版。

1884.	36	グリーンの仕事であったロッツェ (Hermann Lotze, 1817-81) の『哲学』 (<i>Logik</i>) 『形而上学』 (<i>Metaphysik</i>) の翻訳・編集を代行 (共訳)。 「知識の学問としての論理学」 (<i>Logic as the Science of Knowledge</i>) を、セス (A. Seth), ホルデン (R.B. Haldane) 編の『哲学批評論集』 (<i>Essays in Philosophical Criticism</i>) に発表。
1885.	37	処女作『知識と実在性』 (<i>Knowledge and Reality</i>) 出版。 「家内工芸・産業協会」 (the Home Arts and Industries Association) が発足・参加。
1886.	38	「ヘーゲルの『美学』への序論」 (The Introduction to Hegel's Philosophy of Fine Art) を翻訳, 序文「あの世に関する真の概念について」 (On the True Conception of Another World) を付して出版。 「慈善組織協会」の「執行委員会」委員長に就任。 「アリストテレス協会」 (the Aristotelian Society) に参加 ¹⁶⁾ 。 「ロンドン倫理協会」 (the London Ethical Society) が発足 ¹⁷⁾ 。
1887.	39	「慈善組織協会」「執行委員会」委員長を辞す。 「ロンドン倫理協会」に参加 (以後 13 年間 ¹⁸⁾)。 「大学公開講座計画」 (University Extension Scheme) のコース配置に則り, 「トインビー・ホール」 (Toynbee Hall) 等の場所で講演開始 (日曜夕刻)。
1888.	40	『論理学: 知識の形態論』 (<i>Logic or the Morphology of Knowledge</i>) 初版 (全 2 巻) 出版。 「アリストテレス協会」副会長 (vice-president) に就任。 「家内工芸・産業協会」で講演 ¹⁹⁾ 。 フィレンツェ (Florence) とボローニャ (Bologna) を訪問。
1889.	41	ロンドン・チェルシーのチェイン・ガーデンズ 7 (Cheyne Gardens) に移住。 『評論・講演集』 (<i>Essays and Addresses</i>) 出版。
1889. 冬		「エセックス・ホール」 (Essex Hall) での講演を開始 (平日夕刻)。 フィレンツェとボローニャを再訪。
1890.	42	「エセックス・ホール」での講演終了 ²⁰⁾ 。
1891.	43	『評論・講演集』第 2 版出版 ²¹⁾ 。
1892.	44	『美学通史』 (<i>A History of Aesthetic</i>) 出版。
1892. 春		グラスゴウ大学 (Glasgow University) より名誉学位が授与される。
1892. 夏		アメリカ・マサチューセッツ州プリマス (Plymouth) の「応用倫理学学校」 (the School of Applied Ethics) の“サマースクール”の講義を, 病気の W・ウォーレス (William Wallace) に代わって担当。6 週間渡米 ²²⁾ 。
1893.	45	『キリスト教国の文明』 (<i>The Civilisation of Christendom</i>) 出版。 ノルウェーに旅行。
1893. 夏		
1894.	46	「アリストテレス協会」会長に就任。 ヴァイマル (Weimar) に友人ピーター夫妻 (Peters) とともに旅行。 ゲーテ (Goethe) の生家を訪問。
1894. 夏		
1895. 12. 13.	47	ヘレン・デンディ (Helen Dendy) と結婚 ²³⁾ 。 『プラトン「国家」必携』 (<i>A Companion to Plato's Republic</i>) 出版 ²⁴⁾ 。 『論理学の本質』 (<i>The Essentials of Logic</i>) 出版。 『社会問題の諸局面』 (<i>Aspects of the Social Problem</i>) (編著) 出版。
1896. 夏	48	スイス (Switzerland) に旅行 (6 週間)。
1897. 4.	49	ロンドンを離れケイターム (Caterham) に移る ²⁵⁾ 。 『道徳的自己の心理学』 (<i>Psychology of the Moral Self</i>) 出版 ²⁶⁾ 。 『哲学的国家理論』 (<i>The Philosophical Theory of the State</i>) の執筆に着手 ²⁷⁾ 。 「ロンドン倫理協会」解散 ²⁸⁾ 。 「ロンドン倫理学・社会哲学学校」 (the London School of Ethics and Social Philosophy) 設立 ²⁹⁾ 。

1898. 3.22.	50	ギリシャに旅行（4月帰国） ³⁰⁾ 。 「慈善組織協会」の「評議会」特別評議員(an additional Member of Council)に就任（死去するまで）。 「アリストテレス協会」会長の職を辞任。
1899. 9.	51	ケイタームからサリー州のオークショット(Oxshott)に移住 ³¹⁾ 。
1899. 9.		『哲学的国家理論』初版を出版。
1900.	52	『プラトン「国家」における青年教育』(<i>The Education of the Young in Plato's Republic</i>)を出版。 「ロンドン倫理学・社会哲学学校」経営悪化のため閉鎖。
1900.春		夫人ヘレンとともにフィレンツェに3度目の旅行（ヘレンは初）。
1901.	53	「慈善組織協会」の「評議会」副議長に就任。
1901. 2.		ウィンチェスター(Winchester), ソールズベリー(Salisbury), ストーンヘンジ(Stonehenge), ニューフォーレスト(New Forest)等イングランド各地を探訪。
1901.12.		ローマに旅行（3カ月） ³²⁾ 。
1902.	54	「慈善組織協会」の系列学校「社会学・社会経済学学校」(School of Sociology and Social Economics)設立。理事長(chairman)に着任 ³³⁾ 。
1903.	55	セント・アンドリュウズ大学(The University of St.Andrews)「道德哲学」教授に着任 ³⁴⁾ 。 セント・アンドリュウズ, ハワード・プレイス(Haward Place) 4に移り住む。
1904. 7.	56	ノルウェーへ旅行。 兄チャールズ・B・P・ボザンケ死去。
1905.	57	ホアンレ(R.F.Alfred Hoernlé)に巡り会う ³⁵⁾ 。 イタリアへ旅行。 保守党バルフォア内閣により設置された「王立救貧法委員会」に「慈善組織協会」のメンバーとして妻ヘレンが委員に選定される ³⁶⁾ 。
1907.	59	英国学士院(British Academy)のメンバーに選出される。
1908.	60	セント・アンドリュウズ大学を辞す。オークショットに戻る ³⁷⁾ 。
1909.	61	バーミンガム(Birmingham)大学から名誉学位, 法学博士(the LL.D.degree)の学位が授与される。 「王立救貧法委員会」終結, 妻ヘレン「多数派報告」(Majority Report)に署名。
1910.	62	『哲学的国家理論』第2版を出版。
1910. 9.		セント・アンドリュウズ大学創立 500 周年記念祝典に参加。名誉学位授与 ³⁸⁾ 。
1910.10.		個人病院(a nursing home)に3週間入院, 手術を受ける。
1911.冬	63	エジンバラ大学(the University of Edinburgh)でのギフォード・レクチャー(Gifford Lectures)での講義開始（5週間）。エジンバラ, メルヴィル・ストリート (Melville Street) 60 の寄宿舎に移る ³⁹⁾ 。 『論理学：知識の形態論』第2版出版。 第4回「哲学国際会議」(International Congress of Philosophy)（於ボローニャ）で次回議長に選出される。
1912.冬	64	エジンバラ大学でのギフォード・レクチャー第2課程が始まる。 『個性と価値の原理』(<i>The Principle of Individuality and Value</i>)出版 ⁴⁰⁾ 。 仏語論文「ルソーの政治的諸観念」(Les Idées Politiques de Rousseau)を『形而上学・道德学雑誌』(<i>Revue de Métaphysique et de Morale</i>)に発表。 「社会学・社会経済学学校」が財政上の問題から「ロンドン経済学校」(the London School of Economics)（ロンドン大学）に接收される ⁴¹⁾ 。
1913.	65	アメリカ, ハーバード大学での講義に招聘されるが拒否（個人病院に再度入院）。 『個人の価値と運命』(<i>The Value and Destiny of the Individual</i>)出版 ⁴²⁾ 。 『精神とその対象との区別』(<i>The Distinction between Mind and its Objects</i>)を出版 ⁴³⁾ 。

1914.	66	第一次世界大戦勃発。
1915.	67	「哲学国際会議」の開催が中止(戦争中のため)。 『美学3講』(<i>Three Lectures on Aesthetic</i>)出版 ⁴⁴⁾ 。 「慈善組織協会」の「評議会」副議長の職を辞す。 心臓疾患が悪化する。
1916.	68	「慈善組織協会」の「評議会」議長に就任。
1917.	69	『社会的国際的理念』(<i>Social and International Ideals</i>)出版 ⁴⁵⁾ 。 「慈善組織協会」の「評議会」議長の職を辞す ⁴⁶⁾ 。
1918.	70	『倫理学連想』(<i>Some Suggestions on Ethics</i>)出版 ⁴⁷⁾ 。道德哲学。 第一次世界大戦終了。
1919.	71	『倫理学連想』第2版出版。 「ベネデット・クローチェの哲学」(<i>The Philosophy of Benedetto Croce</i>)を『クオーターリー・レビュー』(<i>Quarterly Review</i>)発表。 「クローチェの美学」(<i>Croce's Aesthetic</i>)を『英国学士院会報』(<i>Proceedings of the British Academy</i>)に発表。 『ゾアル』(<i>Zoar</i>)出版(ヘレンとの共訳) ⁴⁸⁾ 。
1919. 6.		オックスフォードを訪問。かつての親友ら歓談(最後)。F・H・ブラッドレーと会合。
1920.	72	『哲学的国家理論』第3版を出版。 『含意と一次的推論』(<i>Implication and Liner Inference</i>)を出版 ⁴⁹⁾ 。 『宗教とは何か』(<i>What Religion is</i>)を出版 ⁵⁰⁾ 。
1921.	73	『現代哲学における諸極の遭遇』(<i>The Meeting of Extremes in Contemporary Philosophy</i>)出版。
1922.10.	74	オークショットからロンドンのゴールダース・グリーン(Golders Green)に移る ⁵¹⁾ 。 イタリア語の論文を発表。“La distinzione di natuira e spirito”, <i>Giornale Critico della Filosofia Italiana</i> , Vol.3, 1922, pp.59-66. ⁵²⁾ ブラッドレー『論理学原理』第2版出版。
1923.		『哲学的国家理論』第4版を出版。 イタリア語の論文を発表。“Il naturalismo e la filosofia del Tusso”, <i>Giornale Critico della Filosofia Italiana</i> , Vol.4, 1923, pp.62-68. ⁵³⁾
1923. 2. 8.		ロンドンにて死去 ⁵⁴⁾ 。
1924.		『精神の本性に関する3章』(<i>Three Chapters on the Nature of Mind</i>)未完。死去後出版。 自叙伝「人生と哲学」(<i>Life and Philosophy</i>)所収のミアヘッド編『現代英国哲学』(<i>Contemporary British Philosophy</i>)が出版される。 論文集『科学と哲学』(<i>Science and Philosophy</i>)がミアヘッドの編集で出版される。
1925.		『哲学的国家理論』第4版重版。
1930.		『哲学的国家理論』第4版重版。
1935.		書簡集『バーナード・ボザンケとその友人』(<i>Bernard Bosanquet and His Friends</i>)がミアヘッドの編集で出版される。
1951.		『哲学的国家理論』第4版重版。
1958.		『哲学的国家理論』第4版重版。
1963.		『美学3講』がザ・ライブラリー・オブ・リベラル・アーツ社(<i>The Library of Liberal Arts</i>)から再版される。
1965.		『哲学的国家理論』第4版重版。
1968.		主要作品がニューヨーク、クラウズ・リプリント社(Kraus Reprint Co.)から再版される。
1993.		グレッグ・リバイバルズ社(Gregg Revivals)より「哲学モダンリバイバルシリーズ」(<i>Modern Revivals in Philosophy</i>)の一つとして、『哲学的国家理論』第4版が重版される。
1996. 8.		ルートレッジ社(Routledge)より『国家哲学と福祉の実践—ボザンケ夫妻著作集—』(全

1999. 1.	8 卷) (<i>The Philosophy of the State and the Practice of Welfare. The Writings of Bernard Bosanquet and Helen Bosanquet. With new Introduction. by D. Gladstone</i>) が刊行。 『バーナード・ボザンケ全集』 (<i>The Collected Works of Bernard Bosanquet. 20 vols. Ed. and intro. by W Sweet.</i>) 刊行。
----------	--

3. おわりに

以上、ボザンケの生涯と著作を、年譜を通じて概観してきたが、そこから判明することは、ボザンケの生涯は、思想家の多くがそうであるような大学教員としてのそれではなく、むしろ「自活」の哲学者としての生涯であったことが挙げられよう。すでに見たように、ボザンケがフェロウおよびチューターの時期を除いて正式に大学の専任職にあったのは1902年から7年にかけてのセント・アンドリューズ大学の教授時代のみであった。その意味で、後期のオックスフォード学派を代表するボザンケの思想は、「安穩」としたアカデミズムに身を置かずに、現実社会の中で鍛えられた、まさに「在野」の哲学者としてのものであったといえよう。

また、ボザンケの現実根ざすというこうしたスタンスは、彼の生涯の第2の特徴、すなわちその活発な実践活動にも具体化されている。特に、彼の「慈善組織協会」での慈善活動、「アリストテレス協会」での学会活動、さらに「ロンドン倫理協会」「大学公開講座」での講義や「社会学・社会経済学学校」の設立に見られる教育活動は、彼の思想形成において大きな役割をもったのみならず、当時のイギリスにおける貧困問題への対処や、学会レヴェルの向上、そして教育環境の改善といった面での彼の社会貢献として特筆されるべきであろう。「在野」であることの特性を活かし、「書齋の哲学者」を自ら否定したボザンケは、一方で実践活動により自らの思想を構築しながら、他方で実践活動により多くの方面に貢献を果たした、まさに「行動する哲学者」と位置づけられる思想家であろう。

さらに、ボザンケの代表的著作『哲学的国家理論』が、1899年、すなわちボザンケが51歳のときに発表されたものであることにも注意を払わねばならない。『哲学的国家理論』は、プラトン、アリストテレス、ホブズ、ロック、ルソーから、カント、フィヒテ、ヘーゲル、マルクス、デュルケーム、ベルグソン、グリーンに至るまでの西欧政治思想史全体の包括的理解のうえに、独自の一般意思論、権理論、国家論、国際関係論、社会主義論等を打ち出したものであり、一見したところではそれはまさに厳格な

哲学書といえる⁵⁵⁾。しかし、その内容は、彼が思想家としてまさに円熟期を迎えたころの書にふさわしく、さきの実践活動を通じて得た現実主義的視座と、グリーンやヘーゲルの思想を継受・克服して思想を展開する理想主義的視座・思弁的視座とが相交錯するものである。このような『哲学的国家理論』の特徴は、現実(実践活動)と理想(思索活動)を統合しようとしたまさに彼の生涯そのものを反映するものといえ、日本の数少ないボザンケに関する論考のものにした北岡勲の言葉を借りれば、まさに現実を見据えながら理想を求める「現実主義的理想主義」(the realistic Idealism)という彼のスタンスを如実に表すものである⁵⁷⁾。ボザンケの『哲学的国家理論』が、生前及び彼の死去以後から今日に至るまで幾度となくリプリントされ、今なお政治思想史上の古典的地位を獲得し続け、さらに近年再び脚光を浴びはじめているゆえんは、こうした側面にも見出すことができよう。

後期イギリス理想主義を代表するボザンケの生涯は、以上のように、常に実践活動を視野に入れつつ現実社会との接点を模索し続けるものであった。そしてこの点は、本稿が大きく依拠してきたヘレン著『バーナード・ボザンケ』のラストを飾る、ボザンケの追悼式での妻ヘレンによる夫への惜別の辞の中で端的に表現されている。そこで、最後にこの惜別の辞を引用して、本稿を終えることにしたい。

「彼は長い間、世界のすべての部分において多くの人々の心の中に人生の意味の解釈者かつ啓示者として独特の地位を保ってきました。彼は真理への情熱を有し、彼の影響を受けた人々を、彼に対する尊敬と真理に対するより大きな情熱でもって満たしました。彼の思想は理解するのに必ずしも容易なものではありませんでしたが、これは人間の経験とは別の外界の事柄に関係していることによるのではなく、彼が無限かつ永遠の真理を扱っているからでした。

(中略)彼の生涯は、偉大な誠実さ、高い勇氣、そして深い愛によって特徴づけられました。彼は常に他人の中に良いものを見ようと努めました。彼は常に平和を支持しました。彼は常に自らの宗教的信仰に照らして生きてきました。」⁵⁷⁾

註

- 1) ボザンケの家系は、“Bosanquet”というそのつづりからも理解されるように、もともとは1685年のナントの勅令の廃止によってフランスから移住したユグノー系であり、時が経つにつれてイングランドとスコットランドの血が混ざりあった家系である。A. C. Bradley, “Bernard Bosanquet”, *Proceedings the British Academy*, 1921-23, p.563, J. H. Muirhead, “Bernard Bosanquet as I Know”, *The Journal of Philosophy*, Vol.20, No.25, 1923, pp. 673.
- 2) 例えば、行安茂・藤原保信編『T・H・グリーン研究』(御茶の水書房, 1982年), 萬田悦生『近代イギリス政治思想研究—T・H・グリーンを中心にして—』(慶應通信, 1986年), 若松繁信『イギリス自由主義史研究』(ミネルヴァ書房, 1991年) 等がある。
- 3) L.T. Hobhouse, *The Metaphysical Theory of the State* (London : George Allen and Unwin, 1918), H・マルクーゼ, 榊田啓三郎他訳『理性と革命』(岩波書店, 1961年)。
- 4) 最近の本格的なボザンケ研究としては, A. Vincent & R. Plant, *Philosophy, Politics and Citizenship* (Oxford : Basil Blackwell, 1984), Peter P. Nicholson, *The Political Philosophy of the British Idealists* (Cambridge : Cambridge University Press, 1990), J. Meadowcroft, *Conceptualizing the State* (Oxford : Clarendon Press, 1995), S. d. Otter, *British Idealism and Social Explanation : A Study in Late Victorian Thought* (Oxford : Clarendon Press, 1996), William Sweet, *Idealism and Rights* (Lanham : University Press of America, 1997), W. J. Mander (ed.), *Anglo-American Idealism, 1865-1927* (London : Greenwood Press, 2000) などがある。
- 5) Helen Bosanquet, *Bernard Bosanquet : A Short Account of his Life* (London:Macmillan,1924)。
- 6) 「ロック」はボザンケ家が古くから開拓してきた地で、約2000エーカーの広さを持つ。Helen Bosanquet, *op. cit.*, 1924, p.3.
- 7) ボザンケの兄弟は次のような顔触れである。長男, チャールズ・B・P・ボザンケ (Charles B. P. Bosanquet)。異母兄弟。後にボザンケ自身が活躍する「慈善組織協会」(the Charity Organisation Society)の創設者の1人。次男, ロバート・ホルフォード・ボザンケ (Robert Holford Bosanquet)。数学者, 物理学者, 王立協会フェロウ, リンカーンズイン法学院 (Lincoln's Inn) の法廷弁護士 (barrister), 音楽家, オルガン製造者。三男, デイ・ボザンケ (Day Bosanquet)。兄弟の中で最長命。海軍総督, 南オーストラリア総督 (1907.2-1914.3)。四男, ジョージ・ボザンケ (George Bosanquet)。第85連隊 (the 85th Regiment) に所属。過労のため早逝。Helen Bosanquet, *op. cit.*, 1924, pp.12-4.
- 8) この頃のボザンケは「全く内気な少年」であった。しかし内心では学校の授業に退屈し, また先輩の横暴ぶりにうんざりしていた。Helen Bosanquet, *op. cit.*, 1924, p.18.
- 9) 当時, 大学ではグリーンよりもジョウエットの影響のため批判的懐疑主義 (critical skepticism) が流行しており, その影響からボザンケは両親の意向に反して教会職に付かないことを決意した。Helen Bosanquet, *op. cit.*, 1924, p.24.
- 10) グリーンは, この当時ボザンケを「彼の世代では必要なものを最もよく身につけた男」として高く評価していた。Helen Bosanquet, *op. cit.*, 1924, p.28.
- 11) マンチェスターへの旅行の際, ボザンケは宿泊場所について「街の中心部で宿泊」と説明されるが, その際「中心」はいかにして正確に知ることができるかについて悩んでいる。これは, ボザンケの哲学的な思索の萌芽と見ることができよう。Helen Bosanquet, *op. cit.*, 1924, pp.19-20.
- 12) ボザンケが友人ブラッドレーの兄, F・H・ブラッドレー (F. H. Bradley) やネツルシップ (R. L. Nettleship) を差し置いてフェロウに選ばれた理由は, 彼らが収めることができなかったグレイツでの最優秀成績をボザンケが収めることができたことによる。A. M. McBriar, *An Edwardian Mixed Doubles : The Bosanquets versus the Webbs* (Oxford : Clarendon Press, 1987), p.153.
- 13) 当時, ユニバーシティー・カレッジは勉学よりも運動重視の傾向があったため, ボザンケの授業はほとんど人気がなかった。しかし, 彼の厳格さ, 良き寡黙さは多くの学生に深い印象を与えていた。また, ボザンケはこの後7~8年間, 休日にはロックへ戻るか, 親戚を尋ねるか, あるいは友人らとスコットランドへ出向き, オークニー諸島 (Orkneys) で射撃等をする生活を送っていた。Helen Bosanquet, *op. cit.*, 1924, pp.29-30.
- 14) このころから, ボザンケは種々の植物が紹介されているバビントン (Babington) 著の『イギリス植物の手引き』(Manual of British Botany) を持

- ち歩き始め、道端で種々の植物に出会うとその植物が紹介されているコーナーの欄外に出会った場所、日づけ、特性等を記し始めた。なお、植物に対するボザンケの関心は、生物学的分類という形で後年の論理学等にも影響を与えた。また、ボザンケはこの他にホメロス『オデュッセイア』(Odissey)を長年休日になると持ち歩いていた。Helen Bosanquet, *op. cit.*, 1924, p.35.
- 15) ボザンケがオックスフォードのフェロウを辞した直接の理由は、彼が遺産相続により金銭的余裕ができたこと、オックスフォードには若干の人物を除いて気の合った人間がいないこと、オックスフォードの教員職には無気力な学部学生を教える必要があること、そして独立した著述期間が欲しいことなどが挙げられる。J.H. Muirhead, "Bernard Bosanquet", *Mind*, Vol.32, 1923, p.399. なお、ボザンケはロンドンで「慈善組織協会」に所属する。彼はまずチェルシー(Chelsea)とショードイッチ(Shoreditch)の「地区委員会」(District Committee)に合流し、その後「執行委員会」(the Administrative Committee)にも参加している。Otter, *op. cit.*, 1996, pp. 180-1. または G.T. Pilcher, "Dr. Bernard Bosanquet", *Charity Organisation Quarterly*, No.5, 1923, pp.75-6. 参照。生活自体は遺産とオックスフォードでの仕事の貯金をもとにやり繰りし、決して富者ではなかったが、国立美術館(National Gallery)、大英博物館(British Museum)、またセント・ジェームズ・ホール(St. James' Hall)でのコンサートにも頻繁に出向いている。またボザンケの甥、姪、従兄弟らがロンドン(近傍)に出て来ていたため、彼らとの交流も深める。特に、ボザンケはその中の女子への教育に熱心であり、そこから女性の尊厳や、精神生活において果たす女性の重要な役割についての高貴な理想を持つようになる。Helen Bosanquet, *op. cit.*, 1924, pp.37-9. ボザンケの慈善活動に関しては、拙稿「バーナード・ボザンケの慈善理論」(『政治学研究論集』第4号, 1996年) 1-20頁参照。
- 16) 「アリストテレス協会」での具体的なボザンケの経歴については、H. W. Carr, "In Memoriam: Bernard Bosanquet", *Proceedings of the Aristotelian Society*, n. s., Vol. 23, 1922-1923, pp.263-272. 参照。
- 17) 「ロンドン倫理協会」は、グリーン、エドワード・ケアード(Edward Caird)らの弟子たちが中心となって発足した。初期の所属会員としては、H・ジョーンズ(Henry Jones), J・ボナー(James Bonar), J・H・ミアヘッド, J・S・マッケンツイ(J. S. Mackenzie), E・カーペンター(E. Carpenter), L・ステファン(L. Stephen)らが出た。詳しくは、Peter Gordon and John White, *Philosophers as Educational Reformers* (London: Routledge & Kegan Paul, 1979), pp. 114-121. 参照。
- 18) 「ロンドン倫理協会」等での講義は、概して一般人向けであったが、ボザンケは決して話す内容のレベルを下げなかった。その結果、軽い気持ちで参加していた流行気取りの女性たちややる気のないものは彼の授業について行けず退席者が続出し、最後には部屋はガラガラになってしまった。Helen Bosanquet, *op. cit.*, 1924, p.49.
- 19) 演題は「教育における芸術的手工」(Artistic Handwork in Education)で、協会の目的と成果に触れながら「美」と関連した独自の教育論が披露された。Helen Bosanquet, *op. cit.*, 1924, p. 43.
- 20) この頃から、ボザンケはスコットランド・オークニー諸島で射撃等をする習慣をやめる。Helen Bosanquet, *op. cit.*, 1924, p. 65.
- 21) この頃から「ロンドン倫理協会」が「大学公開講座計画」の中核を担うようになった。Helen Bosanquet, *op. cit.*, 1924, pp. 45-6.
- 22) ボザンケにとっては最初で最後の渡米。ケンブリッジ、ハーバード、シカゴ、ソルトレイクシティ、イエローストーン国立公園等を視察。Helen Bosanquet, *op. cit.*, 1924, pp. 68-9.
- 23) ボザンケとヘレンは、以後27年間、生活を共にした。Helen Bosanquet, *op. cit.*, 1924, p. 71.
- 24) 『プラトン「国家」必携』は「ロンドン倫理協会」での講演をまとめたもので、その講演は、開講当初使用する予定であった教室が人数が多いために大教室に変更となったほどの人気ぶりであった。なお、ボザンケはロンドンでインド文官(Indian Civil Service)選出の試験官も務めていた。Helen Bosanquet, *op. cit.*, 1924, p. 62.
- 25) ボザンケは健康上の理由などからケイタームに移った。Helen Bosanquet, *op. cit.*, 1924, p. 72.
- 26) この書は、ロンドンを離れる直前に完成していた。Helen Bosanquet, *op. cit.*, 1924, p. 75.
- 27) ボザンケは「ロンドン倫理協会」や「ロンドン倫理学・社会哲学学校」での仕事を活かしながら、ここでの議論を展開した。Helen Bosanquet, *op. cit.*, 1924, p. 48.
- 28) 解散の理由としては、「協会」で倫理運動(the Ethical movement)や「大学公開講座計画」から独立した哲学教育の実施が決定されたことが挙

- げられる。Helen Bosanquet, *op. cit.*, 1924, p. 47.
- 29) 「ロンドン倫理学・社会哲学学校」は「協会」のかわりとして、パスモア・エドワード・セツルメント (the Passmore Edwards Settlement) を根拠地として形成された。この学校は教師や労働者階級を学生とするため講習料は安く、基本的にボランティアの寄付金に依拠していた。ボザンケはそこで講演を続行した。Helen Bosanquet, *op. cit.*, 1924, p. 47. また「ロンドン倫理学・社会哲学学校」に関しては、I.D. MacKillop, “The London School of Ethics and Social Philosophy : an adult education movement of the 1890s”, *History of Education*, Vol.7, No.2, 1978, pp.119-127. 参照。
- 30) ギリシャ旅行での体験から、ボザンケは考古学 (archaeology) に関心を覚えその講義に出席し始める。これと関連して『インターナショナル・ジャーナル・オブ・エシックス』第9号 (International Journal of Ethics, Vol.9, 1898-99) に「アテネの歴史からの教訓」(A Moral from Athenian History) を発表。後に『社会的国際的理想』に収録。Helen Bosanquet, *op. cit.*, 1924, p. 76.
- 31) ボザンケは、親友ロックが当地に家を建築していたことからこの地に移り、ロックの家の隣に持ち家 (“The Heath Cottage”) を建築した。その家で、ボザンケはいわゆる“男仕事”をこなす一方、仕事の合間を縫いメレディス (George Meredith), ハーディ (Thomas Hardy), ディケンズ (Charles Dickens), ド・モルガン (De Morgan), ボズウェル (James Boswell) 等の作品、及び『オデュッセイア』, ダンテの『神曲』(Divina Commedia) を特に好んで読んだ(ボザンケは“サンデースクール”でこうした作品を読了しない限りその受講者を合格させなかった)。また、ボザンケは植物だけでなく鳥や昆虫などにも関心をもちはじめ、ファーブル (Henri Fabre) の著作を愛読するようになった。さらに、朝昼には2,3の意見の異なった新聞をよく読み、現実の政治にも常に関心を払っていた。詳しくは、Helen Bosanquet, *op. cit.*, 1924, pp. 79-88.
- 32) ボザンケはイタリア語を当地で学習した。ここでの勉強が、後年のイタリア哲学研究に役立った。Helen Bosanquet, *op. cit.*, 1924, pp. 103-4.
- 33) この学校はソーシャルワーカーを育成することを目的とした。McBriar, *op. cit.*, 1987, pp. 153-4.
- 34) ボザンケは招聘されたのは、D・G・リーチー (David George Ritchie, 1853-1903) が死去したためであった。セント・アンドリュウズでの道徳哲学の授業では、それまで騒々しかった学生も彼の講義開始とともに静かで真摯な態度になり、教室はまるで教会のようになった。また、ボザンケは普段は学生に対しては静かな態度でふるまっていたが、イジメなどが発生した場合には厳格に対処していた。また、学生との親交は授業のほかにも学期に少なくとも1回以上の昼食会や、研究室で学生が書いたものを批評・議論するという形で深められた。議論ではボザンケは自己の主張に反駁するものがいたとしても、その人物に一定の苦痛や嫌悪感すらも決して与えなかったといわれている。Bradley, *op. cit.*, 1921-23, p.569. また、授業ではそれまでのセント・アンドリュウズ大学の伝統を継受する形で、道徳哲学にのみ限定せずプラトンといったギリシャ古典を視座に入れた授業が展開された。同時に、ボザンケはセント・アンドリュウズ大学前教授であり「慈善組織協会」の思想的先駆者であるチャルマーズ (Chalmers) の方法を継受して、道徳哲学に経済学 (Political Economy) の側面を導入して授業を展開した。さらに、ボザンケは大学業務も着実にこなしながら、種々の事柄に関して教員が議論する「ディスカッション・イブニング」(discussion evenings) や、当地で初めて知ったゴルフをほぼ毎週行うことで教員間の親交も深めた(ボザンケはすべての人が平等に扱われるゴルフ場でのデモクラシーに好感をもっている)。なお、ボザンケはオークショットの自宅に4月と夏期休暇の時に戻っている。Helen Bosanquet, *op. cit.*, 1924, pp. 105-121.
- 35) 当委員会とボザンケの関係については、拙稿「バーナード・ボザンケと「王立救貧法委員会」(1905-09)」『明治大学社会科学研究所紀要』第36巻第2号, 1998年) 79-93頁, 同「バーナード・ボザンケの社会政策思想」(『政治学研究論集』第7号, 1998年) 21-40頁参照。
- 36) ホアンレは、ボザンケの講義・研究のアシスタント(3人)のうちの1人で、ボザンケにとって終生の友人である。Helen Bosanquet, *op. cit.*, 1924, p.112. 彼はボザンケのことを次のように回顧している。「カントの言葉を用では、私は彼から哲学ではなく哲学すること (*nicht Philosophie, sondern philosophieren*) を学んだ。」R. F.A. Hoernlé, “In Memoriam : Bernard Bosanquet”, *The Journal of Philosophy*, Vol.20, No.19, 1923, p. 505.
- 37) セント・アンドリュウズ大学を辞した理由としては、定期的な講義への重責感、著作活動へ意

- 欲, 妻ヘレンの衰弱等が挙げられる。Helen Bosanquet, *op. cit.*, 1924, p. 120.
- 38) 名誉学位は, グラスゴウ大学, ダラム大学 (Durham), バーミンガム大学に続き 4 回目の授与。Helen Bosanquet, *op. cit.*, 1924, p. 129-130.
- 39) ボザンケは講義の合間や予習の合間には近隣に住む従兄弟を訪問した。また, エジンバラ滞在中に民族学の先駆的著作『金枝篇』(The Golden Bough) の著者フレーザー (Sir James Frazer) と面会した。Helen Bosanquet, *op. cit.*, 1924, p. 130.
- 40) 1911 年のエジンバラ大学でのギフォード・レクチャーの講義内容。
- 41) 詳しくは, 金子光一『ビアトリス・ウェブの福祉思想』(ドメス出版, 1997 年) 116-123 頁参照。
- 42) 1912 年のエジンバラ大学でのギフォード・レクチャーの講義内容。この 2 年にわたる講義は, ボザンケの形而上学の最も優れた展開と評されるものである。R. B. Haldane, "Bernard Bosanquet", *Proceedings the British Academy*, 1921-23, p. 575.
- 43) マンチェスターでの「アダムソン・レクチャー」(the Adamson Lecture) での講義をまとめたもの。なおこの年, 1877 年から始まったバビントン著『イギリス植物の手引き』への種々の記入が終わる。Helen Bosanquet, *op. cit.*, 1924, pp. 130-1.
- 44) ロンドン大学, ユニバーシティ・カレッジでの講義内容。Helen Bosanquet, *op. cit.*, 1924, p. 130.
- 45) オックスフォード大学, ロンドン大学, ベッドフォード・カレッジ (Bedford College), 「リバプール社会科学学校」(Liverpool Social Science School) 等で行った講演を収録したもの。Helen Bosanquet, *op. cit.*, 1924, p. 130.
- 46) この頃からボザンケはイタリア哲学に関心を持ち始め, クローチェ (Benedetto Croce) 研究に入る。Helen Bosanquet, *op. cit.*, 1924, p. 139.
- 47) ヘレンは『倫理学連想』の論稿を「最も美しく実践的なもの」と評価。Helen Bosanquet, *op. cit.*, 1924, p. 139.
- 48) この書は, ボザンケ自身が好んだ様々な詩 (ギリシャ語, ラテン語, ドイツ語) を, 若き日を回想しながらヘレンとともに翻訳したものである。Helen Bosanquet, *op. cit.*, 1924, pp. 140-1.
- 49) 『含意と一次的推論』はブラッドレー『論理学原理』第 2 版と刊行時期が重ならないよう発表を遅らせていた作品で, 『論理学』の発展的作品である。Helen Bosanquet, *op. cit.*, 1924, pp. 140-1.
- 50) 『宗教とは何か』は, 第一次世界大戦後の人々の荒廃した精神状況に鑑みて書かれた作品である。Helen Bosanquet, *op. cit.*, 1924, p. 141.
- 51) ボザンケがこの地を選んだのは, ヘレンの兄弟, 及びその家族が居住する地域に近いこと, 徒歩 10 分以内のハムステッドヒース (Hampstead Heath=ロンドン北西部の高地帯ハムステッドにある公園) に近いこと, 病状悪化のため友人等と面会できることなどが挙げられる。ボザンケはロンドンに移るため, 家具をオークションに供し, 1.5 トンにも及ぶ本を売却し, 約 200 冊の本をボザンケ自身の哲学蔵書として選別した。Helen Bosanquet, *op. cit.*, 1924, pp. 145-8. なお, その蔵書の一部が今も「ボザンケ・コレクション」(Bosanquet Collection) としてロンドンの「王立哲学研究所」(Royal Institute of Philosophy) に残っている。Peter P. Nicholson, "A Bibliography of the Writings of Bernard Bosanquet (1848-1923)", *Idealistic Studies*, Vol.8, 1978, pp. 261-2.
- 52) この概要は, 1935 年刊行の『バーナード・ボザンケとその友人』に収録。J. H. Muirhead (ed.), *Bernard Bosanquet and His Friends* (London: George Allen & Unwin, 1935).
- 53) この概要も前出『バーナード・ボザンケとその友人』に収録。
- 54) ボザンケは, 葬式で晩年特にお気に入りであった「ハレルヤ・コーラス」(Hallelujah Chorus) をオルガンで演奏され, 友人に見守られながらゴールダーズ・グリーン火葬場で火葬された。また, ボザンケの生前の希望から遺骨は庭園にまかれ, 名前と日づけのみが刻まれた簡素な墓碑が回廊 (cloister) にたてられた。Helen Bosanquet, *op. cit.*, 1924, pp. 150-1.
- 55) ボザンケの政治思想に関しては, 拙稿「ボザンケ」, 岡野加穂留・伊藤重行編『政治思想とデモクラシーの検証—臨床政治学の基礎』(東信堂, 2001 年), 同「バーナード・ボザンケの「実在意志」論」(『政治学研究論集』第 3 号, 1996 年) 35-52 頁, 同「バーナード・ボザンケの社会主義観—「フェビアン協会」とボザンケ—」(『政治学研究論集』第 5 号, 1997 年) 1-19 頁, 同「バーナード・ボザンケの J・S・ミル批判」(『政治学研究論集』第 6 号, 1997 年) 1-20 頁, 同「バーナード・ボザンケの国家=権利論」(『政治学研究論集』第 9 号, 1999 年) 39-58 頁等参照。
- 56) 北岡勲『政治的理想主義』(御茶の水書房, 1986 年) 249-251 頁。同『イギリス政治哲学の生成と展開』(御茶の水書房, 1987 年) 546-548 頁。
- 57) Helen Bosanquet, *op. cit.*, 1924, pp. 151-2.